

佐世保市立中里中学校いじめ防止基本方針

【学校教育目標】

- ①情操豊かで協力的な、相互の人権を尊重する人
- ②学力と体力と思いやりをもった人
- ③自ら学び、自ら考え、意欲的に行動する人

【目指す生徒像】

- 明るく礼儀正しい生徒
- 勇気と思いやりのある生徒
- きまりを守り、実践力のある生徒

【PTAとの連携】

懇談等さまざまな機会を利用して、生徒の頑張りや長所、心配なことなどをこまめに保護者に連絡したりして、日ごろから保護者との信頼関係を築く。

○PTA役員・保護者会

【生徒指導部会】

校長・教頭・生徒指導主事・学年生徒指導担当

【いじめ対策委員会】

生徒指導部会に加えて、養護教諭、担任（必要に応じて）、スクールカウンセラー、心の教室相談員等を加えて構成する。

【教育委員会】

- 学校教育課
- 青少年教育センター

【関係機関】

- 子ども子育て応援センター
- こども・女性・障害者支援センター
- 警察
- 民生児童委員・主任児童委員

【いじめの定義】（いじめ防止対策推進法第2条 平成25年6月28日施行）

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人間関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

【いじめが解消している状態】

1 いじめに係る行為が止んでいること

被害者に対する心理的または物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）が止んでいる状態が相当の期間（少なくとも3か月を目安とする）継続していること。

2 被害生徒が心身の苦痛を感じていないこと

いじめに係る行為が止んでいるかどうかを判断する時点において、被害生徒がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。面談等により確認する。

※「いじめが解消している状態」とは、あくまで一つの段階に過ぎず、「解消している状態」に至った場合でも、いじめが再発する可能性が充分にありえることを踏まえ、当該いじめの被害生徒及び加害生徒について、日常的に深く観察していくことが必要である。

【いじめの防止】

- (1) 保護者や地域との連携
- (2) 道徳教育の充実
- (3) 生徒指導の充実
- (4) 特別活動等の充実
- (5) 生徒理解等校内研修の充実

いじめを生まない生き生きとした学校づくりに向け、校内の指導体制の確立、家庭・地域社会との連携強化、いじめの問題を自分たちの問題と捉えられる子どもの自己指導能力の育成を図る。

【早期発見】

日頃から生徒の見守りや信頼関係の構築等に努め、生徒が示す変化や危険信号を見逃さないようアンテナを高く保つ。併せて、児童生徒理解支援システムの効果的な活用を図るとともに、定期的なアンケート調査や教育相談の実施等により、生徒がいじめを訴えやすい体制を整え、いじめの実態把握に取り組む。

ア 教職員による観察や情報交換

生徒のささいな変化に気づいた場合、教職員がいつでも情報を共有するよう努める。また、「児童生徒理解支援システム」を効果的に活用する。

イ 定期的なアンケート調査や個人面談等の実施

生徒の生活実態について、定期的なアンケート調査や個別面談、生活ノートの活用等きめ細かな把握に努める。

ウ 教育相談体制の整備

校内に生徒や保護者等の悩みを積極的に受け止めることができる教育相談体制を整備する。また、その充実に向け、市教育委員会と連携し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、学校内外の専門家の活用を図る。

エ 相談機関等の周知

学校以外の相談窓口について、周知や広報を継続して行う。

【いじめに対する措置】

- (1) 的確な情報収集
- (2) 基本的な緊急対応
- (3) 調査による実態把握
- (4) 解決に向けた指導・援助
- (5) 継続指導・経過観察
- (6) 再発防止

ア いかなる場合も真摯に受け止め、関係する友達や保護者からの情報収集等を通じて、事実関係の把握を迅速かつ正確に行い、関係者全員でその解決に取り組む。

イ いじめられている側の保護者の心情を、教職員は同じ立場に立って受け止める。そして、いじめの問題を自らの課題として捉え、全教職員が緊密な情報交換や共通理解を図り、一致

○組織的な対応イメージ

①いじめの予防

- 校内体制の確立
- 「いじめ対策ハンドブック」、「いじめのない学校・学級づくり実践資料集」、別添<参考資料>の活用、事例研究等による教職員の対応力の向上
- 人権意識と生命尊重の態度の育成
- 「特別の教科 道徳」を要とした教育活動全体を通じて行う道徳教育の充実
- 生徒会活動を通じた自己指導能力の育成
- 生徒の「規範意識」「おもいやり」の育成
- 家庭・地域社会、関係機関との連携強化

②いじめの情報



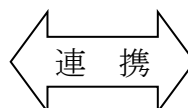
③情報を集める

- 教職員、児童生徒、保護者、地域住民、その他から「いじめ対策委員会」に情報を集める。

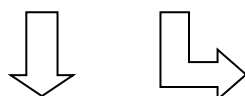


④指導・支援体制を組む

- 「いじめ対策委員会」で指導・支援体制を組む（学級担任、養護教諭、生徒指導担当教員、管理職などで役割を分担）



関係機関



⑤A 生徒への指導・支援

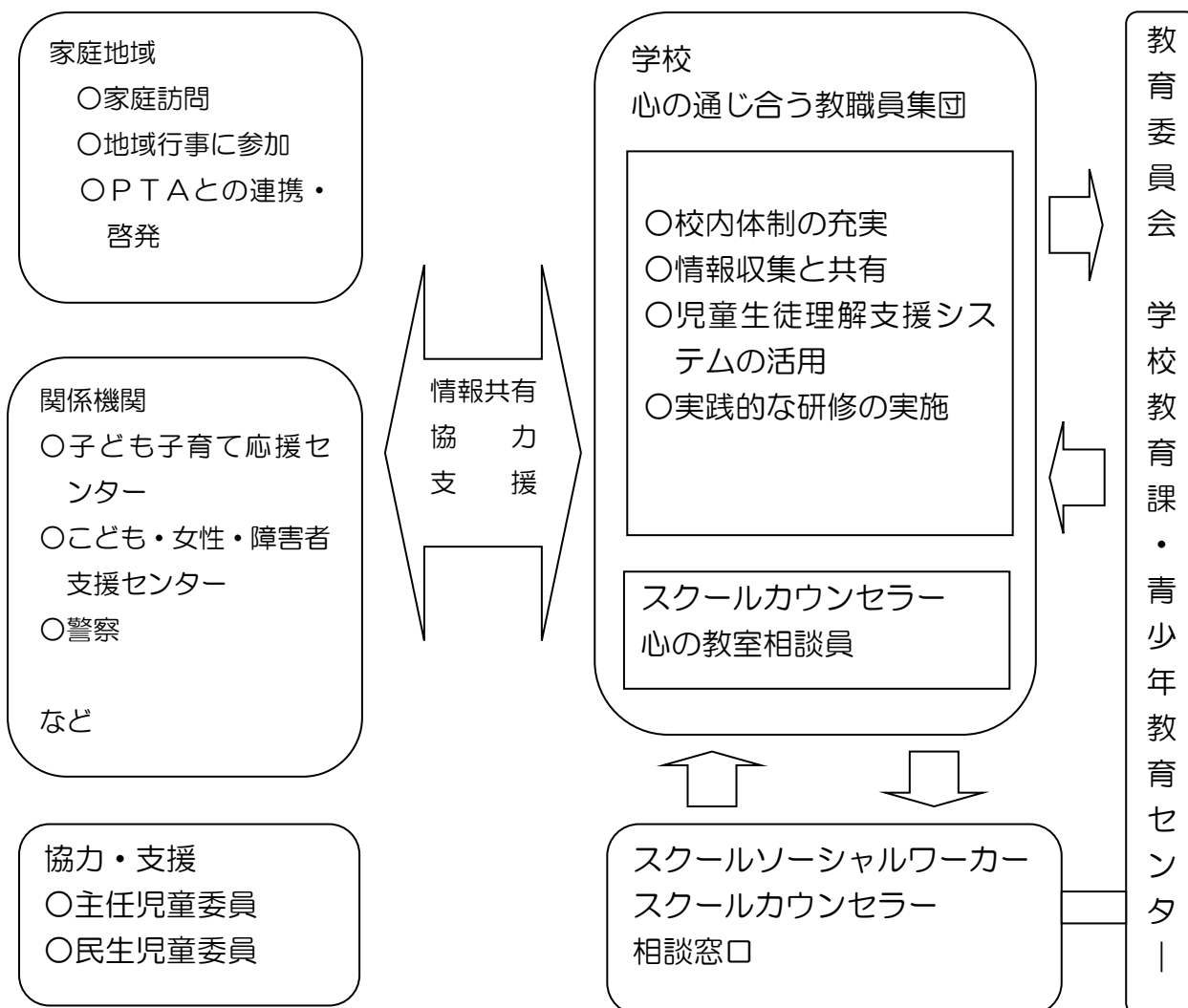
- いじめられた生徒にとって信頼できる人と連携し、寄り添い支える体制を作る。
- いじめた生徒には、いじめは人格を傷つける行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させるとともに、不満やストレスがあってもいじめに向かわせない力を育む。
- いじめを見ていた生徒に対しても、自分の問題として捉えさせるとともに、いじめを止めることができなくても、誰かに知らせる勇気を持つように伝える。

⑤B 保護者と連携する

- つながりのある教職員を中心に、即日、関係生徒（加害、被害とも）の家庭訪問等を行い、事実関係を伝えるとともに、今後の学校との連携方法について話し合う。

- 随時、指導・支援体制に修正を加え、「組織」でより適切に対応する。
- 常に状況把握に努める。

〇いじめ防止のための校内体制と関係機関との連携



命と人権を大切にする集団づくり